
Cursed child-たったひとつの願い-

翅桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C u r s e d c h i l d ― たったひとつの願い ―

【Nコード】

N 5 7 9 0 G

【作者名】

翹桜

【あらすじ】

現代、日本。日本の邪魔になる存在を消去する組織。その組織の兵器となり、呪われた能力を操り、消去していく。そんな存在の世麻は……

プロローグ…存在理由（前書き）

血や、死があります。苦手な方は読まないようにしてください。

プロローグ…存在理由

もしも、こんな能力がなかったら。

もしも、平凡な普通の毎日が過ごせたら。

どんなに幸せだっただろうか…？

—プロローグ—

『生きたいか…？生きたいなら…』

殺せ』

鳴り響く銃声。

叫び声にも似た泣き声。

視界は赤く染まる。

「世麻、前だっ！」

その声に反応して前に意識を集中させる。

飛んできた銃の弾が頬を切った。

その瞬間、飛び出して来た奴に発砲する。

弾は相手の足に当たり、血が飛び散る。

「っ…！てめえは何者だ…！」

相手の顔を片手で覆うとグッと力を入れる。

その途端バチバチと火花がちり、相手の顔が燃え始めた。

「うああああ！！顔が！俺の顔がッ！！」

手を離すと、地面を這いつくばって苦しむ。

――…なんて愚かなのだろう…。

「あ” ああ…！」

銃声が鳴り響き、

僕のものではない血が僕を汚した。

「帰るぞ。」

冷たい感触が僕の肩に触れる。

「はい、先生。」

先生の少し後ろを歩いて建物から出る。

外は暗いものの、何故か眩しく思え目を細めた。

生ぬるい風が頬を撫でる。

「やれ。」

ゆっくりと手を上げ、手のひらを建物に向ける。

意識を集中させた途端、建物は大きな爆発音をたて燃えていった。

「魔^ま麻、零^れ麻、羽^は麻、詩^し麻。

帰るぞ。」

どこからともなく出てきた4人は血で体を染めていた。

僕と4人に先生はローブを渡し、車に乗って去って行った。

「今日はおしまい！」

ニコリと笑う零麻を横目に詩麻は呟く。

「殺してって私にせがんできたの…。

何も罪なんてない人を追い詰めて、殺して、私達は何してるんだろ
…？」

「殺さなければ死ぬ。生きるために殺す。

それだけだ。」

ちから

「…それがこの能力をもって生まれた宿命なんだ。」

生きる意味なんてなにもない。

抱きしめられるぬくもりも、

目が眩むほどの日の光も、

なにも知らない。

それでも、生きたい…。

生きたいから…——殺す…。

ブログ：存在理由（後書き）

ダメ文を読んで頂きありがとうございました。
どんどん組織や能力を明かしていきたいとおもいます。

1..キミトボクノキヨリ（前書き）

国に障害となる人物を抹殺。それを運命とされた能力者。本編、1話目です。

！注意！

血や死が出てきます。苦手な方はおススメできません。

1..キミトボクノキヨリ

最後に握った母の手は、小刻みに震えていた。
血がにじむほど唇を噛み、やつれた顔に何かに酷く怯えた中にも
光を宿した目を光らせていた。

キミトボクノキヨリ

雨でぬかるんだ地面は歩くたびに泥がはねた。

「羽麻。」

僕が指示を出すと、羽麻は遠くに見えるログハウスに近づいた。
詩麻は黒く長い髪を結い始めた。

「いいよ。」

羽麻の指示でログハウスへ走った。

近づき、ログハウスに聞き耳を立てた。

『組織もあの能力ちからをもったガキ共さえ処分すれば、
なにも恐れるものはない。』

小さく聞こえた声に魔麻まはグッと拳を強く握った。

「どいて。」

零麻れおの声に頷いてログハウスから少し離れる。

零麻は銃を構え、発砲した。
それとほぼ同時に僕達も発砲した。

———.....。

銃でボロボロになったドアを蹴り開けて、中に入る。
中は血の海で死体が転がっている。
そのとき、ガタツと物音がした。

「っ！！！」

全員死んだはずじゃ……！
そう思って勢いよく振り返ると、端のほうで小さい子供を抱きしめ、
小さくなっている親子がいた。

怯えた目で僕をきつく睨んでいた。

「……っ！殺し屋！この子を殺したら許さない！！」

叫ぶように話す母親に銃を向けながら近づいていく。
母親の服をギュっとなつかみ、涙を流す子供を見ると、
冷や汗が流れた。

身体が動かない。

小刻みに震える。

頭が痛い。

頭を殴られたような衝撃が走り、
遠い【記憶】が目の前に映り始めた。

なんだよ、これ。

どこなんだよ、ここ。

動揺がおさまらない。

目が泳いでるのがわかる。

手から銃が滑り落ちていく。

『息子さんを我々に渡して下さって本当にありがとうございます。』

『やめてくださいっ!! 息子なんかじゃない! こんな化け物っ! 早く連れて行ってください…。同じ場所に居るだけでどうにかなりそう…。!』

僕はただ、崩れていく母親の顔を見つめることしか出来なかった。

『それでは、最後に一言子供に言ってあげてください。』

母親は僕の目線までしゃがむと耳元で囁いた。

「……、はやく死んでちょうだいね…。?」

そのまま母親は僕に背を向け歩きだした。

『お母さん? まって、お母さん!』

黒尽くめの奴に僕は建物の中に連れて行かれる。

『お母さん! 置いてかないで! お母さん、お母さん!!!』

それが母親との別れであり、先生、組織との出会いだった。

奇妙な能力ちからをもった子供が生まれて、

幸せなはずの生活が壊されて、

どれだけ苦しかったろうか。

母親なんて嫌いだし、思い出したいくない思い出だけど。

それでも、壊れていきながら育ててくれた母親の存在が大きかった。

ダンツと、耳元で銃声が響いた。

その音で目の前が現実に戻っていった。

響いた銃声は目の前にいた親子を打ち抜いていた。

ゆっくりと倒れていく2人を見つめた。

そのとき、軽い痛みが頭に走った。

「世麻^{せお}、ボーっとすんな。」

零麻は軽く僕を一発叩くと笑った。

国の情報が入ったディスクを奪って逃げようとしていたこいつら。組織にその情報が来れば、すぐに消去される。

「みいーつけ。」

羽麻はディスクを僕に見せた。

ディスクを持ってログハウスを出ようとすると、母親の手が少し動いた。

銃を構え、母親に発砲した。

大量の血が流れはじめた。

「なんか、疲れた。」

「世麻、今日なんもしてないじゃん。」

「一応したけど。」

建物の中と言っても、冷たく寒い部屋の一角を僕の部屋としていた。羽麻は僕のベッドに横になり、組織のメンバーファイルをめくった。

「ねえ、世麻は6歳のときここ来たんだね。」

「うん。」

「あたしは4歳なんだけどね、世麻が来た日のこと覚えてるよ。」

羽麻は明るく笑うけど、僕は笑うことは出来なくて。

誰かに背を向けられることにどこか恐れていて。

「羽麻、世麻。次の任務だ。」

「「はい、先生。」」

今まで多くの人の命を奪い、これから大勢の人の命を奪う。

それは許されない事。

それでも、生きる場所は、帰る場所はここしかなくて。
だから生きていくために、僕にしかできないことをやっていく。

母親との距離はもう一生うめる事はできない。

仲間や先生ともこれ以上距離を縮めようとは思わない。
それでも、生きていくために。

例えば自分を殺していくとしても…

1..キミトボクノキヨリ（後書き）

ぜおの悲しい過去はどうでしょうか。
みんな成長させていきたいと思います。
組織のこともっと出していきます。
感想をいただけると嬉しいです。

2..それは一瞬。(前書き)

さまざまな過去を心に秘めた能力者の想い…。

注意はありません。

2..それは一瞬。

手に意識を送れば、赤い炎が燃える。
いくつものモノを燃やしてきた。
何度も自分の感情を燃やしてきた。
でも、それを癒せるものは何ひとつなかった。

それは一瞬。

「やれ。」
何時もの冷たい声と同時にナイフを持った、何人かが飛び出してくる。

そいつらの攻撃をうまく避けながら、そのうちの1人の腕を掴む。
掴んだ手に意識を送る。

小さな爆発音と共に掴んだ腕に火が着いた。
「うわっ。」

小さな叫び声を出し、僕から逃れるように1歩下がる。
周りの奴らも一瞬怯み、冷や汗を流す。

ナイフを握りなおし、僕に立ち向かってきた。
攻撃を避け相手の握るナイフを落とさせる。
それを相手より素早くナイフを拾い、構える。
少し油断したとき、腕に痛みが走った。
腕を見ると、久しぶりに見た自分の血が流れている。
それから能力をうまく使い、
ちから

全員を倒したときには息が切れ、肩を揺らしていた。

「なんか、今日の訓練の相手強くなかった？」

僕が訓練室から出ると、少し遅れて他の4人もそれぞれの訓練室から出てきた。

「そうそう。なんか毎回強くなってる気がするし。」

「1番最初する訓練の、的当ての的も小さくなってるし。」

「それをこなしてる自分も怖いし。」

どんどん能力が強くなり、そのうち自分でコントロールできなくなる。

能力が僕を支配する。

そんな遠くない未来を恐れている、僕らがいる。

冷たい部屋に5人集まり、素っ気のない料理を食べる。

「詩麻、醤油取って。」

羽麻が言うと、醤油は宙に浮き羽麻の元へ勝手に動く。

「ありがとう。」

私生活でも詩麻はよく能力を使っていたし、

それほど能力は身体の一部となっていた。

他にも、

電気を扱う零麻。

水、氷を扱う魔麻。

風を扱う羽麻。

それぞれが目覚めてしまった能力を

恨みながらも、精一杯馴染もうと努力してきた。

今までつくってきた絆や、想いや、生活や、夢が目覚めた事で一瞬に崩れ落ちた。

普通だった生活も一生懸命になっていたことも叶わなくなっていく。

『お前の名前は今日から【ぜお】だ。』

冷たい瞳の中にどこか暖かさをもっていた先生は、泣きじゃくる僕の肩を持ち、そう話した。

『組織の事は暮らしていくうちに分かるさ。』

さあ、今日は疲れたろう？おやすみ…。

先生の声は不安の中に安心があって、僕は倒れこむように眠りについた。

もう定かではない家族の顔は僕らにとって、存在理由ともなっていた。

「世麻、^{ぜお}どうした？」

魔麻は僕の肩を叩いた。

「あ…。いや、なんでもない。」

「食わねえの？もーらいっ！」

僕の分のパンを零麻が取る。

その零麻の手に火をつける。

「は！？あちっ！」

その途端、魔麻が零麻の手に能力で出した水ちからをかける。

「てめっ、ふざけんなよ。」

「人の取るな。」

「だってさ…。羽麻笑うな！」

そんな何気ない会話も存在していると実感できることで。

いつ死ぬか分からない、この世界の中で精一杯生きている証拠で。一瞬の出来事が生死を分ける。

もがき苦しんで、苦しみのどん底から這い上げれると信じて。
そしたら、きつと笑えると願って。

苦しみ、死、血——…

きつとこの思いから抜け出せると信じて…
声が枯れるくらいの叫び声を、幸せな涙に変えることができると信じて…

誰かが心から必要としてくれると信じて…

たったの少しでいい。

幸せな夢をみたいから。

2..それは一瞬。(後書き)

感想をもらえたら嬉しいです！

3.. 繋いだ手から【絆】（前書き）

それぞれの不幸な過去や運命。

それを共に分かち合っていけるもの。

それは……

！注意！

話の中で血が出てきます。

苦手な方はおすすめてできません。

3.. 繋いだ手から【絆】

『「いやだああああ!!」

体中に走る痛みも、

目を背けたくなる光景も、

なにもかもが生きている証でしかない。』

「今回の任務は、国の情報を狙っている奴らの消去だ。
心してかれ。」

先生の指示で建物内に入り込む。

分かれ道をバラバラになり、それぞれ進む。

誰もいない。

そう思って、少し油断したのがダメだった。

「…!」

痛みを感じたときには、もう体は自由に言うことを聞かなかった。

ダンッ!

ダンッ!

何発もの銃撃を受けた。

体にいくつの弾が入ったのだろうか。

ふと、そんなことを考えた。

――…、死ぬのか…？

痛みをもう感じない。

暖かいのか寒いのか分からない。

ただ、目の前に広がるのは紛れもない自分の血で。
視界の高さは自分が倒れているということだ。

死にたくない

死にたくない

死にたくない

焦ると気持ち悪くなり、口から血が出てくる。

むせて咳が止まらない。

それだけの事で、肩で息をつくほど息が上がる。

「死んだか？」

「いえ、まだ息があります。」

「そうか…。これほどの傷でも生きているとは、さすが能力者だな。」

僕を見下げる冷たい目はじつと僕を見た。

「おい。国の情報、教えろよ。」

倒れている僕の髪を鷲掴み、しゃがんだ時の目線まで

僕の頭を持ち上げた。

「…だ、れが…、おし…え、るか。」

相手は舌打ちをすると、力強く掴んでいた頭を床に叩き付けた。

もう倒れこんでいた体にとっては、それほど強い痛みは感じなかった。

分かるのは、体から血が流れていることくらいだった。

目を閉じようと思っても、思うようにいかない。
今まで何人もの今の僕と同じような人々を見てきた。
それが今の僕だと考えると、なんだか可笑しかった。
「っは、はは…っ！」
思わず笑ってしまふ。

「は、ははっ……。」「」
笑いが止まった頃、まぶた瞼が重くなってきた。
死が近い。
そう思った。

そのとき、重い扉を開ける音がした。
開けた扉から入ってきたのであろう足音は、
僕の方へ近づいてくる。

重い瞼を閉じ、軽く息を吸い込む。

足音は僕の傍でピタリと止まった。
聞き取れない小さな声で足音の持ち主は何かを話していた。
誰かが僕の頭を掴んで、持ち上げた。

「っ…。」

僕は薄く目を開いた。
ぼやけて、焦点の合わない視界には2人の男が映った。
「何も話さないなら、生かしておく理由はない。
さっさと殺してしまえ。」

「はい。」

命令した男の煙草の臭いが鼻につく。

カチリッ

こめかみに銃の冷たさを感じる。

ああ、僕は頭を撃ち抜かれて死ぬのか…。

そんな事をぼんやり考えた。

能力ちからを使って逃げようか。

手に力が入らなくて、その考えは捨て去られた。

もし、能力ちからが使えても、この体じゃ逃げ切れないのは分かりきっている。

もう、生き残るための手段は何ひとつ残ってはいなかった。

薄く開けていた瞼をゆっくりと閉じる。

殺すなら、早く殺せ。

そう思っていると、ガラスを割る音が建物中に響いた。

「なんだっ!？」

男は思わず僕の頭から手を離した。

床に頭をぶつけた衝撃でさっき閉じた目をもう一度開いた。

「うわあああああっ!！」

男を眩しいくらいの電気が囲んでいた。

電気同士がぶつかり合い、火花が散る。

「いやだああああ!！」

もう1人は叫び声と共に足から徐々に氷漬けになって行く。
この能力ちからには見覚えがあった。

零麻れお…

魔麻まお…

「世麻ぜお!」

聞き覚えのある声が聞こえ、僕の傍へやって来た。

「酷い怪我…。急いで、戻らないと。」

焦った中にも冷静さを持った、詩麻しおの声が眠気を誘った。

「世麻、寝ちゃダメ！」

羽麻^{はお}の焦った声に笑みがこぼれる。

「わかって、る…。」

「喋んなっ！」

零麻は強く言い放つと詩麻の顔を見た。

それが合図かのように詩麻は頷き、僕に手を向けた。

フワリと体が宙に浮いた。

その途端僕は深い眠りについた。

「寝ちゃダメ！」と言う羽麻の声を残して。

長い間、夢を見た。

いつもの悲しい夢なんかじゃなくて、幸せで楽しい夢。

現実はいつも厳しくて、辛くて、息をするのがやっとで。

もう、現実なんか見たくもない。

いっそ、このまま夢を見続けたい。

そう思っていると、声が聞こえた。

『世麻！』

涙で震えた声は確かに僕の名前を呼んでいた。

今まで僕はなんのために生きてきたのだろう？

理由なんてない。

探しても、考えても、理由は思いつかない。

誰かに必要とされてもいなければ、存在でさえ疎まれて。

『ぜ、お！ぜおっ、世麻！』

ただ名前を呼んでくれて、

僕に笑いかけてくれて。

たったそれだけのものが欲しくて。

信じる事が出来なくても、どこかでいつか報われると信じていた。
傷つきたくない。

それでも、可能性があるなら。
助けてくれたアイツらが僕を呼んでくれるなら。
この声が途絶えるまで…

「っ…！」

重たい瞼を開くと、身体中に広がる激痛にもう一度目を瞑った。
今度はゆっくりと目を開くと、魔麻と零麻が僕の部屋の椅子に座っているのが見えた。

規則正しく肩が動くのを見れば、眠っていると分かる。

右手と左手に感じる温もりは、詩麻と羽麻が手を握っていたことだ。
右手を強く握りながら、うつ伏せになり、布団に顔を埋めて眠る羽麻の頬に涙の跡が見えた。

左手を軽く握り、椅子に腰かけたまま眠る詩麻は、いつもの警戒心が見えた。

そんな詩麻に頬が上がった。

抱き締めてもらった思い出は何一つなかった。
裏切りが僕をつくり、憎しみが僕を強くする。
零麻たちや先生とは深い関係で関わるつもりなんてなかった。
また裏切られるのが恐くて。
次こそは僕が僕を殺しそうで。

それでも、手を繋いでくれて、温もりを与えてくれて…

——…名前を呼んでくれて…

それがある限り、生きる理由となり、僕を強くしてくれる。
そう信じてる。

信じていたいから…。

助けてくれた仲間がいるから、もう一度手を繋いで。

信じて、仲間を守り、守られ、少しずつでいい…。

少しずつ、そういう関係を築いていけるようになりたい。

ありがとう、名前を呼んでくれて。

ありがとう、助けてくれて。

ありがとう、笑いかけてくれて。

ありがとう、ありがとう、ありがとう…。

もう二度と繋いだ手を離さないように……。

3.. 繋いだ手から【絆】（後書き）

やっと、心を許せる人を見つけた世麻。
どうでしたか？

感想をいただけると、嬉しいです。

4. いちごみるく（前書き）

信じられるものが出来た世麻に降り注ぐ転機。
注意はありません！

4..いちごみるく

「反組織と言う存在をお前たちは知ってるか？」

いちごみるく

組織に所属している能力者を部屋に集め、先生は重々しく話し始めた。

能力者は年齢、性別もバラバラで、その大半は顔も知らない人が多かった。

「組織の考えを否定し、国自体を変えようとしている者たちだ。能力者の存在を世界に知らし、能力者が支配をする世界をつくる。それが、反組織だ。」

能力者が思い思いの事を呟く。

その中にも、反組織の考えを納得する奴もいた。

「そして、その組織が動き始めた。

今までも反組織は国にとって、目障りな行動をとっている。そこで任務だ。

反組織を潰せ。

反組織にも、組織を抜けた愚か者の能力者がいる。
心してかれ：！」

反組織：

それは、心を能力ちからに囚われた者たち。

組織：

それは———……

「今までは、能力ちからや年齢でチームを作り活動していたな。
しかし、能力ちからが進化した今、
この任務を実行するためチームをつくり直す。」

衝撃が走る。

ざわめきが大きくなり、多くの能力者が口々に文句を言う。

「黙れ！！！」

シンツと、部屋中が静まりかえる。

「チームを発表する。」

先生は冷たい声で言いになった。

「まず、音麻ねお。」

音麻と呼ばれた男は、短い髪に筋肉質な体つきが印象的だった。

「次、奈麻なお。」

奈麻は、背が高く、長い髪で顔を隠した暗そうな女だった。

「羅麻らお。」

次は背と比例していない痩せた体に、大きな目がギョロついた男だった。

「歌麻かお。」

明るい髪に、それと同じ位に明るい顔をした女が呼ばれた。

「世^ぜ麻^お。」

僕は立ち上がると、今まで付けていたチームバッチを取り、新しい5班のバッチを貰った。

新しいチームで集まる。

どのチームも無言で、嫌な空気が流れた。

どいつも、やっと信じることできた仲間との別れは納得できなかった。

仲間意識を強めた僕たちに先生はわざとチームをつくり変えたように思った。

「じゃあ、自己紹介でもするか…？」

音麻はよく通る声で話した。

「一番年下から。世麻。」

「へえ、てつきりその暗い奴が一番下かと思ってた。」

歌麻は羅麻を指差すとわざとらしい笑みを浮かべた。

「世麻。年は15。能力^{ちから}は発火。」

歌麻の声を無視して僕が話すと、

奈麻は小さくビクついた。

「次、羅麻。」

「あ…あ、の…。」

羅麻は言葉を詰まらせ、なかなか話し出さない。

「…ムカつく。」

僕は思わずそう言っていた。

羅麻は怯むと下を向いて話さなくなった。

「まあ、そんな事言うなよ。」

音麻は面倒見が良いのだろう。

僕をなだめると羅麻に根気よく話しかけていた。そんな光景を楽しそうに歌麻は見つめていた。

「え…っと。羅麻です…。歳は17で、能力は結界です…。」
17に見えないほど、固まっている羅麻を僕は鼻で笑った。

ギョロついた目が泳ぐ。

こんな奴が能力者だなんて皮肉だ。
そう思わずにはいられなかった。

「次、あたしね。歌麻です！」

歳はね、羅麻と同じく17歳ね。能力はマリオネット。
人を操り人形みたいに操れるんだよ。凄いでしょ！」

歌麻は明るく話すと、満面の笑みでメンバー一人ひとりと握手しはじめた。

「はい、握手！」

僕は手を差し出した歌麻の手を無視した。
すると歌麻は無理やり僕の手を握った。

「な…奈麻で、す。歳は19で、能力は、治療です…。」
僕は、怯えるように話す奈麻に少しイラつきながら奈麻を睨んだ。

「じゃ、最後は俺だな。名は音麻。歳は21で、能力は怪力だ。」
思わずため息が出る。

能力者のくせして、普通の人間と変わらない接し方で僕に接してくる。

幼い頃から人の暖かさなんて知らなかったけど、
幼いながらに考えた想像の人は音麻のような人だった。

調子が狂う。

このチームでやっていけるのだろうか。
そう思わずにはいられなかった。

「はぁ…。」

ベッドに横になり、ため息をついた。

「なあにため息ついてんの？」

「っ！」

いきなり聞こえた声に驚いて、勢いよく起き上がった。
そこには歌麻がいた。

「気配もなく入ってくるな。ここは僕の部屋だ。」

歌麻はイタズラっぽく笑うと、僕に手を差し出した。

「ねえ、手、出して。」

「は？」

しばらく沈黙が続いた。

その空気にうんざりした僕は手を差し出した。

歌麻はその僕の手には飴玉を置いた。

「…なに？」

「あのさ、疲れた時には甘いものだよ。」

あたしたちって、普通の生活はできないじゃん？

今日だって、せっかくできた仲間と別れたし、人を信じることはできない。

笑う事だってできる人は少ないでしょ？」

「だからなんだよ。」

「アンタだって笑えない人なんでしょ？」

だったらあたしが変わりに笑ってあげる。

笑顔ってつられるものだよ。

だからいつか、あたしにつられて笑えるようにあたしが笑うの。」

歌麻は寂しそうな顔をした。

「甘いもの食べて、ちょっとでもリラックスしてね。」

歌麻はそう言うのと部屋から出て行った。

笑えば他の人と変わらない事ができることがあるかも知れない。
笑うことを忘れた僕には、歌麻の言う事が分からなかった。
それでも、もう一度笑ってみたい。
そう思った。

「あま…。」

飴玉を口にほうると、口にイチゴが広がった。
この飴こそが歌麻そのものだと思う。
甘ったるくて、ホントにどいつも調子が狂う。

甘い、甘いこのチームで僕は生きていく。

4..いちごみるく(後書き)

新しいチームで活動する世麻たち。

それぞれが不安を抱え、歩いて行きます！

感想を頂けると嬉しいです♪

5..もしも、神様がいるならば…（前書き）

新しいチームになり、不安を抱えた世麻たち。

反組織消去の任務に向かった世麻たちに、新たな問題が…

5..もしも、神様がいるならば…

いつ死ぬか分からないこの人生で、
できるだけ多く生きていると実感するために…

もしも、神様がいるならば…

「世麻^{せお}、どうする？」

「情報が少なすぎる。相手の能力^{ちから}も、行動もつかめない。

まあ、取り合えず、情報を集めるのが一番賢い行動^{ねお}だろう？」

音麻は可愛げのない僕の返事に苦笑すると、
立ち上がり、ズボンに付いた砂を払った。

反組織の消去のために、組織本部からかなり離れた場所に僕らは来
ていた。

今までにない緊張感が漂い、それぞれ失敗が目立った。

そしてなにより、新しいチームになって初めての任務でもあり、
心を許しきれない状況にあった。

チームを編成をしてから、訓練や食事、私生活を共にし、
出来るだけチームの状況を良くしようとしたのは音麻と歌麻^{かお}だった。
それでも、奈麻^{なお}や羅麻^{らお}は相変わらずだった。

「：お、ぜお、聞こえる？」

ザザ——：

と言う雑音の後、耳に着けていたイヤホンから歌麻の声が聞こえた。

「ああ。」

「すこしだけ、情報つかめたよ。」

どこに居るのだろうか。遠くから幾つかの話し声が聞こえていた。

「反組織は本部の他にも、各地にいくつかの組織を持っている。

能力者はあたし達組織の方が多いけど、一般市民が組織内にいる可能性が高い。」

一般市民の前に姿を現してはいけない。

何より、能力者の存在を知らしめる事が許されない。

だから、反組織内に一般市民がいる可能性がある中、突入する事はできない。

市民に何かあれば組織を初めてとして、国も危うい。それは避けなければならぬ。

組織にしか僕たちが住む場所はない。

だから、僕たちはただならぬ不安を感じていた。

「だから、今は様子を見るしかないかな？

無駄に探って見つかったも駄目だし。」

「わかった。」

僕が返事をする、イヤホンからは何も聴こえなくなった。

「聞いてた？」

僕の問いかけに音麻は頷いた。

「無線は俺のと繋がってるし、お前にかかってきたのもちゃんと聞こえる。」

草むらの中に僕と音麻は座り込んだ。

遠くに見える反組織本部に動きはなく、人がいるのかさえも分からない。

逃げたか？

一般市民はいるか？

奴等はどう動く？

能力はなんだ？
ちから

何も分からない。

そのとき、耳をつくような悲鳴が響き渡った。

「っ！？世麻！」

「わかってる！」

強く地面を蹴り、走り出す。

肌で感じるほどの殺気が漂う。

近くなってきた建物は、近かよれば近寄るほど生活感のないことが分かる。

鉄筋コンクリートの建物は錆びて今にも壊れそう。

銃を構え、建物の影に隠れる。

「人いんのかよ…。」

音麻の呟いた言葉はもつともで、僕も疑わずにはいられない。

「さっきの悲鳴の正体が分からない限り、動けない。
調べるしかないだろ？」

「でも、うかつに近寄ったのは間違いだったかもな。」

音麻の言葉に、思わず声が漏れた。

「確かに…な。」

――…ガンッガンッ!

建物内から何かを強く打ち付ける音がする。

「ここまで来たんだ。どうせ見つかるなら入るか。」

音麻は素早く建物に入っていた。

「おい…!」

僕は焦って音麻に付いていく。

建物の中は暗く、ゾツとするような冷たい風が吹いていた。気配を出来るだけ消し、ゆっくり奥へ進んで行く。

「った…。」

前を歩いていた音麻にぶつかった。

「音麻?急に止まるな…:っ!」

目を凝らしてみると、そこは血の海だった。

いくつもの死体が転がっていて、そこら中に血が飛び散っている。鼻をつく腐った臭いに僕も音麻も顔をしかめる。

「字^じ麻…?」

今にも消えそうな音麻の声が響く。

音麻はひとりの死体に近づいていく。

「おい、触んなよ。」

僕の声を無視してその死体を抱き起こす。

「字麻…、字、麻?嘘だろ…?」

なあ、起きろって。ふざけんなよ…ふざけんじゃねえ!!」

悲痛な叫びが部屋中に広がる。

字麻と呼ばれた死体の服には【2】と書いてあるバッチが着いている。

バッチには組織の紋もはいつていて、組織の一味だと分かった。
頭からの出血を見ると、さっきの何かを打ち付ける音は
頭を壁に打ち付けられた音だと思う。

叫び声も字麻の声だと納得できる。

音麻がもともといたチームの1人だったのか…。

もし、音麻が僕で、字麻が零麻^{れお}たちの誰かだったら。

僕は立っていることさえ出来なくなって、壊れてしまいかも知れない。

それは、家族に見捨てられたときよりもずっと怖いことだと思う…。

「なんでっ…！なんで勝手に突入してんだよ…？
危ないことくらい分かれよ。」

震える声で無理に笑う音麻が痛々しかった。

「いつも、こいつ勝手にさあ…。」

注意しても聞かなくて…。」

「音麻…。」

どうしたら良いのか分からない。

どう声をかけたら良いのか分からない。

「ほんと、勝手に入って来て、そのくせ直ぐに死にやがって。
くつくつと笑う声が背後でした。」

「だれだっ！」

僕は大声で姿の見えない相手に問う。

銃を構え直し、出来るだけ目を凝らす。

…———ズキュンッ！！

…耳元で銃声が響いた…。

もしも、僕に能力ちからがなかったら…
もしも、能力者という存在がなければ…
もしも、組織と言う存在がなければ…
もしも、反組織なんてなければ…
もしも、こんな場所に来なければ…
もしも、もしも、もしも、もしも——…

願いはいつだって叶わない。
過去はいつだって皮肉で。
未来はいつだって血に染まる。

だけど、もし神様がいるのならば…
一瞬でいい。
この銃声を消してください——…

5..もしも、神様がいるならば…(後書き)

感想をいただけると嬉しいです☆

6..幻覚使い（前書き）

反組織の存在を消滅する任務を受けた世麻たち。
その中で、世麻と音麻は調査を行う。
2人に降りかかる新たな敵は…

6..幻覚使い

ハッとして、目を開くとそこは暗闇の中だった。

幻覚使い

「音麻…？」

僕の声は虚しく響くだけで、返事をする声はなかった。
人の気配はまるでない。

寒い…。

足が震える。

怖い…。

感じたことの無い感覚。

確か、耳元で銃声がして。

あの弾はどうなったんだろう？

僕に当たった？

それとも音麻に？

もしかしたら、奴は外したのかもしれない。

…とにかく此処から抜け出さなければ。

でも、どこか分からない此処からどうやって…？

目の前がぼやける。

考えろ…考えろ……。
気を失った訳じゃない。

それなのに、僕を知らないところに連れて行く事はできるわけが無い。

此処に来る前に聞いた声は、字麻じおを殺した風に話していた。
その事も入れて考えると、何かの能力ちからとしか考えられない。

…此処に…？

考えられるのは、瞬間移動ワープか…

それとも、幻覚…

だとしたら…

僕は、持っていたナイフで自分に刃を向けた。

勢い良く腕を斬りつけた。

「っ！！」

痛みが体中に広がる。

そのとき、視線の先にあった暗闇が歪み始める。

合間から光がもれ、僕も笑みをこぼした。

「なにっ!？」

エコーのような声が響く。

「…幻覚、使いみたいだな…？」

僕が言うのと暗闇は眩しく輝き、元居た場所へ変わっていった。

僕の腕からは思ったよりも大量の血が流れ落ち、
傷が深いことがよく分かった。

「自分を傷つけて能力をとくなんて、頭可笑しいんじゃないの!？」
声の主は、どこからどう見ても僕より年下のガキだった。

「ガキがほざくな。」

「うるさいっ!」

ちょっとした事でムキになるなんてやっぱガキだ。
こんなガキも反組織にいるなんて……
そう思わずにはいられなかった。

弾は？

さっき撃たれた弾は？

辺りを見渡すと、僕の血ではない血が飛び散っている。
音麻の姿はなく、冷たくなった字麻がいるだけだった。

「おい。奴をどこにやった……？」

このガキの力では、僕よりも背の高い音麻を運べる訳がない。

「さあ？さっきの傷、深かったし

今頃死んでんじゃない？」

あの弾は音麻に当たった。

そして、別の奴に連れて行かれた。

そう考えるのが一番しつくり来る。

僕は仲間に助けられた。

傷を負ったとき、それは死を感じる。

もし、それを音麻が感じているならば……

——…カチッ！

火花が散るような音と共にガキの足元が燃える。

「うわあっ！」

ガキは大げさに避けると、僕に手に向けた。

また、視界が歪みはじめる。

「ちっ……。」

僕は舌打ちをし、境界線のように僕の周りを炎で囲む。

ガキの能力と僕の能力が反発して、

バチバチと音が鳴る。

しかし、僕よりも早く能力を発動させたガキの方が僕
の炎を飲み込んでいった。

ヌルっとした冷たい感触が僕の足に触れる。

驚いて足をみて、ギョツとする。

見たことの無い腐った手が、僕の足を強く掴んでいた。
思わず足を振り払い、前を見ると視界いっぱい
目を覆いたくなるような死人の顔が映った。
しかも、どいつも見たことのある顔だった。

人の記憶をいじりやがって。

そう思っても、自然と冷や汗が流れる。

『…人殺し…』

『許さないっ…!』

『殺してやる!』

そいつらは恐ろしい顔で僕に言い寄る。

口々に言っているのも何を言っているのか分かってしまう。

「ハアッ…ハア…!」

息が乱れ、尋常じゃないほど足が震える。

怖いわけじゃない。

幽霊や亡霊なんて怖くない。

そんなんが怖いわけじゃない。

……自分が怖い…

こんなにもの人を殺していたと思い知らされる。
僕は…何なんだ？

ただの人殺し…？

「ッ…ハッ…ハア…」

意味が分からない。

今まで気にしていなかった事が頭に流れてくる。

気付いた時には走り出していた。

幻覚だと分かっているはずなのに必死になってもがいてしまう。
走っていると、思いっきり何かにぶつかった。

「痛…。」

勢いがあり過ぎて、派手に転けた。

ゆっくりとぶつかった何かを見上げた。

「あ…っ！」

血の気が引くのが分かる。

そこにいたのは…

最後に見た、母親の姿だった。

母親は何かを言うが、聞き取れない。

「分かんねえよ…！」

思わず耳をふさぐ。

聞きたい

聞きたくない

自分が分からない。

もう、定かではない母親の姿は懐かしいよりも恐ろしいものだった。
母親の口は止まらず、ひたすら何かを口にする。

「っ…嫌…だ…！！消、えろっ！」

呂律がうまく回らない。
震えていた足が、更に震える。

『はやく死んでちょうだいね……？』

え……？

母親の声が聞こえた。

一度聞こえると、頭に残る。

頭の中で響く。

最後に聞いた母親の声。

最初で最後の母親の願い。

何かが切れた。

激しい激痛が頭に響く。

「いやだあああああああ！！」

頭を抱える。

痛い……

怖い……

苦しい……

「あ……あああ……。」

何かが消えていく。

これは悪い夢だ。

そうに違いない。

「っ……あ、ああっ……！」

あの消し去りたい過去はもう終わった。
なのに、どうして……！

「ちく、しょ…。」

幻覚で僕を追い詰めて。
絶対に許さない。

「くっ…！」

いくらもがいても震えた体は動かない。

大丈夫、これは幻覚なんだから。

そんな事には思えない。

僕は弱いから…

強くなりたい…

強く……

6..幻覚使い（後書き）

過去に振り回される世麻たち。

どうだったしょうか？

忘れられない嫌な思い出に立ち向かう世麻を
次も書いていきます！

感想を頂けるとうれしいです♪

7..流れ星ひとつ(前書き)

音麻とはぐれ、世麻の前に現れた少年。

少年の能力に困惑する世麻に少年は更に能力を発動させていく……

！注意！

血が表現されています。

苦手な方はおすすめてできません。

7..流れ星ひとつ

いくら泣いても涙は止まらなくて…
いくら声が枯れても叫びたくて…

流れ星ひとつ

——…ズキユンツ…!

僕は震える手で弾を放った。

幻覚で出来た母親は弾をすり抜けただけで、消えはしない。

「く、そっ…。」

ぐっと拳を握った。

早く覚めろ、覚めてくれ。

さっき幻覚を覚ますために傷つけた腕が痛む。

これを覚ますためにまた傷つけると体がもたない。

そのとき、ガクンと体の力がぬけた。

怖さや不安、全てが真っ白になっていく。

僕が僕でなくなったように体が勝手に動く。

右手をゆっくりあげ、母親に向けた。

うるさいほどの火花が散る音が鳴る。

——…ドンッ！！

激しい爆発音になり、辺りが火の海となる。

爆風で僕は飛ばされた。

地面に打ち付けられ、体が自分のものに戻った。

「ハアっ…ハ、ア…」

息がきれ、体力がいまの能力でかなり減ったのが分かる。

僕の能力であって、僕の能力でない。

勝手に能力が発動した…。

思い出したら寒気がする。

怖い…

能力に飲まれてしまいそうで。

——…ドンッ…

また小さな爆発音がする。

その途端、幻覚の暗闇の間から光がもれた。

——…

『なあ、——。遊びに行こうか。』

『そうね。動物園にする？水族館の方がいい？』

『えっとねー。どうぶつえん！』

光の間に親子が見えた。

どこか見たことのある光景だった。
丁度名前のところが聞き取れない。

『いやああ…!』

『おい、人が燃えてるぞ!』

ああ…。

僕だ。

記憶から無理やり消した思い出だ。

まだ能力の存在に気付いてなかった頃。
ちから

：動物園で…、起こったんだ…。

両親とはぐれて、1人で歩いてた。

誰かとぶつかって、泣いてた僕は余計に涙が出た。

『ちっ…』

舌打ちをされた事に、怖くて。

怖い、そのとたん体が熱くなって、気が付いたら人が燃えていた。

何が起きたのか分からなくて、ただ体が疲れきっていた。

自分がやったのかわからなくて、それでも自分の疲れきった体が『

犯人』だと言っているように。

『……!』

『……、お前…』

『ぼくじゃ、ない!』

母親は僕の名前を叫ぶように呼び続け、

父親はいつものように僕を抱きしめず、

僕の変わりに、怯える母親を抱きしめていた。

僕の周りから人は居なくなつて、離れたところから陰口を言う人ばかりだった。

僕が燃やしたのであろう人の家族が、僕に声にならない叫びで何かを話す。

怖かつた。

どうしようもなかった。

普通に人間が何も使わずに人を燃やすことなんて出来ない。

それでも、得体の知れない子供が人を燃やした。

その事実はその場にいた人々にとって思い知らされた事だった。

幻覚は更にぶれ始め、光から見えた幻覚も歪んだ。

そして、一瞬のうちに消え去った。

「くそっ！」

ガキは悔しそうに地団駄を踏み、僕を睨みつけた。

僕は許せなかった。

頑張って、頑張って、頑張って忘れた記憶の欠片。

それを一瞬に思い出させた。

それがこいつの能力の使い道であつて、

戦闘において最も効果的だって分かる。

それでも、僕にとって思い出さなくてもいい事実をもう一度思い知らされて…。

僕が存在が分からなかった。

思いもしない場所で初めて能力が発動して、
それが僕の全てを変えた。

あのととき、散々呼ばれた名前はすっかり記憶から抜け落ちて、
幻覚でみた記憶からも名前だけが分からない。

それは、どこか悲しいものだった。

僕はガキに能力ちからを発動した。

ガキも能力ちからを発動したが、間に合わない。
爆発音と共に火が辺りに燃え移る。

「っ！」

ガキは素早く火から逃げて、足に火傷を負っただけだった。
僕はゆっくりとガキに近づくと、銃を構えた。

「や、め…っ。」

ガキに命乞いさえせず発砲した。
ガキの血が僕の服へ、顔へ飛び散った。

「ね、お…。」

もう、自分がコントロールが出来ない。
自分の気持ちちからが能力ちからに埋もれていく。
ただ能力ちからが僕を戦場に狩り出すだけ。
それだけ。

「…行か、ねえと…。音麻が…。」

今思うのは、音麻を助ける。
それだけ…

流れ星が消える前、三回願い事を言えたら願いは叶う。
今ならそれが信じられる。

また、流れ星が流れる。

7..流れ星ひとつ（後書き）

能力と自我に分からなくなっていく世麻。
どうだったでしょうか？

感想、評価を頂けるとうれしいです☆

8..接近戦(前書き)

なんとか敵を倒した世麻は仲間を探しに…

！注意！

血の表現が出てきます。

苦手な方にはおすすめてできません。

8..接近戦

今にも壊れそうなこの部屋には、血が飛び散^{ねお}っていて音麻の血なのかどうなのか分からない。

この戦闘に決着はついたのか？

どっちにしろ、音麻が無事ならこの胸騒ぎも治まるのだろう。

接近戦

僕の能力はやつと静まり、

音麻がいるのであろうこの部屋にたどり着く頃には、すっかり姿を消していた。

体も自分の意思で動くし、精神的にも落ち着いてきた。

建物内を歩いていると、幾つもある部屋のひとつに殺気が漂っていた。

銃を構え、部屋に突入したがこの有様だった。

息を凝らすものの、腕の傷が疼いて息がもれる。

殺気の正体は分からない。

「ハァ…。」

柱の角に隠れるようにもたれた。

自分で傷つけるならもっと浅く傷つけるんだった。

もう遅い後悔をしながら痛む腕を押さえた。

「ぜ、お…?」

か細い音麻の声が聞こえた。

「音麻?」

柱からそっと覗いてみると、血まみれになった音麻がいた。

「おい!」

急いで駆け寄ってみるが、音麻には大きな怪我は見当たらず音麻の血ではないことが分かる。

「よかった…。世麻^{せお}の気配がするから、来てみたら…。」

音麻はゆっくりと近づいてきた。

その途端、音麻は凄惨な形相で走ってきた。

手に光るナイフはしっかりと僕を捉える。

キンツと高い金属音と共に音麻のナイフが飛んでいく。

隠し持っていたナイフで僕は音麻のナイフを弾き飛ばした。

「音麻の顔被ってんなよ?」

「なんで分かった?」

相手は顔を粘土のように操る。

気持ち悪いほど顔は変わっていき、ある顔に手は止まった。

「音麻はここに来る前、ガキに銃を打ち込まれた。

その傷がないのは可笑しいだろ?」

「…なるほど。次から気をつけるよ、ゼオくん。」

「気安く呼ぶな。何で名前を知ってる?」

「さっき殺った奴が呼んでたからね。ズーっと。」

音麻は待ってた。

僕を：

音麻は助けを求めている。

僕に：

僕にとって仲間はいまいち分からなくて。

それでも、仲間に助けられた。

その仲間と別れる事になっても、せめて、新しい仲間『ありがとう』と言えるように。

：僕はまだ『ありがとう』って言えてない。

新しいチームで人一倍頑張ってくれた音麻に。

なあ…、音麻？

ごめんな…

僕はナイフをしまった。

その代わりに銃を構え、走り出した。

相手は落としたナイフを拾い、構える。

発砲すると、ナイフで弾を弾き飛ばした。

「ちっ：。」舌打ちをひとつ打ち、銃をもう一度発砲する。

相手はうまく柱に隠れて避ける。

弾を素早く取り替え、隠れた相手を目で探す。

気配を隠した相手はなかなか見つからない。

かと言って、動いて探すのも気が引ける。

相手はナイフを持っていた。

服装から見て、その他の武器を隠し持っているとは考えにくい。
能力は自由自在に顔を変えられる。
ちから

それくらいしか分からない。

能力は普通ひとつだが、あの程度の能力で

反組織の名を口にするのは難しい。

そう考えると、何か裏がある。

それに、簡単に音麻が負けるのは何か理由があったはずだ…。

「考え事は戦闘中にダメだよ。」

急に背後から感じた気配に驚いて反応が遅れる。

相手のナイフが僕の頬をかすめた。

血が頬を流れ、相手と僕の間で沈黙が一瞬流れる。

沈黙を破るように同時に動いた。

僕は一旦しゃがむと相手に蹴りをいれ、体制を崩させる。

蹴りはうまく入り、ほんの少しよろけた。

そこにもう一発蹴りをいれた。

「くそっ。」

相手は柱に体を打ちつけた。

ゆっくり立ち上がると、口元の血を乱暴に拭いた。

「お前、名は？」

僕の問いに、頬を少しあげ血の混じった唾を吐いた。

「誰が言うかよ！！」

地面を強く蹴り、僕に飛び掛ってくる。

相手の拳を避け、僕も相手を殴る。

相手も避け、放られた僕の手を相手は強く握った。

「…何故、ゼオくんに名乗る必要がある？」

「勝手に名前を知られて気に障るからだ。」

「やり返すの？子供だね。」

相手はニヤリと笑う。

体をねじり、蹴りを入れようとしたが僕の手を離すだけで当たりはしなかった。

銃を発砲するが避けられる。

さっきの戦闘で能力を消費した僕は

莫大な能力を使つて倒すことは出来ない。

相手の行き先を阻み、発火するので精一杯だった。

相手は自分の腕を弄り始めた。

さっき顔にやったように粘土のように操る。

腕は化け物のような形になる。

そのまま僕に向かってきた。

派手な金属音が響く。

相手は腕のはずなのに、硬く、鋭かった。

銃を発砲しても、避けたり、腕で防ぐ相手に傷は付かなかった。

銃の弾にも限りがある。

まだ、任務は続く中、弾を切らすわけにはいかない。

銃を丁寧に終うとナイフを強く握った。

汗ばむ手はナイフを滑らせた。

8..接近戦（後書き）

ダメ文を読んで頂いてありがとうございます。
感想や評価も頂ければ嬉しいです☆

9..犠牲（前書き）

傷ついた世麻の前に現れた相手に、不利な状況に追い込まれた。

！注意！

血や死の表現があります。

苦手な方はおすすめてできません。

9..犠牲

——…キンッ！キンッ！！

激しい金属音が鳴り響く。

「っ、ハァ…。」

息が切れて、体が重く思うように動かない。

「その程度かよ！？」

相手は疲れを知らず、変形した鋭い腕を振り回す。

僕は防ぐので精一杯で、攻撃に移ることが出来ない。
不利な状況が続く。

犠牲

「あっ…。」

後ろはもう行き止まりで、逃げることは出来ない。

「やっと捕まえた。」

笑顔で近づいてくる相手から目を離さず、

動揺する頭をフル回転させる。

どうする？

逃げることは出来ない。

このままだと殺されるのがオチだ。

手に、仕込ませているナイフに触れた。
ハッとして相手の腕をみる。

相手の腕は肘から手にかけて変形している。
変形していない肘から上は…？

相手はやられっ放しの僕に油断している。

相手は僕にどんどん近づいてくる。

そして、僕の胸倉を掴み、宙へ持ち上げた。

「くっ！」

喉が締め付けられ、思うように息ができない。

ナイフを握り締め振り上げた。

「何をする気だ？分かっていないはずだろう？

お前の銃も剣も俺の腕を突き通さない！傷をつける事でさえっ…！」

相手が話しているすきに二の腕にナイフを刺した。

変形していない二の腕は思った通り、ナイフで裂けた。

「うわああああ！」

血が噴出し、相手は痛みあまり僕の胸倉を放した。

首が絞められていたからか、うまく着地が出来ず

そのまま地面に落ちた。

「何をっ！！」

血相を変えて相手は暴れ狂う。

相手は体中を粘土のように操り始める。

「くそっ、くそっ！」

怒りのあまり、感情的になる相手は空きだらけだった。

————…カチッ！

火花が散る音がして相手は動きを止めた。

その途端爆発音が鳴り、爆発した。
ほぼ全ての力を使い果たした僕は倒れ込んだ。

やった…

そう思ったのもつかの間、

奇声をあげた相手が爆発でおきた煙から飛び出してきた。

「ハアアアア！！！」

もう、原型を留めていない変形した姿は恐ろしかった。
体中変形した姿は攻撃するすきがない。

なにより、体は動かず、起き上がることさえ出来ない。

「う、ごけっ！」

唇を強く噛むが、力が入らない。

相手は僕をまたぐように立ち、ナイフを構えた。

「ハハハッ！」

声を出して笑う相手は、グッと顔を近づけてきた。
息が顔にかかる。

「…死ぬ…！」

ナイフが僕に突き刺さろうとした途端、
銃声が聞こえた。

「っ！？」

相手は僕から離れた。

驚いて銃声が聞こえた方向を見ると、歌麻^{かお}が立っていた。
「か、お？」

——…ズキュンズキュン！！

歌麻にいつもの笑顔はなく、どこか遠くを見るような何も映らない目をしていた。

相手は身軽に弾を避けていく。

軽やかに着地をして見せると、歌麻に鋭い腕を向けた。

「近くにきたら!？」

落ち着きがなく、叫ぶ相手に恐怖を覚える。

歌麻？

どうしてここに？

別の場所で反組織について調べてたんじゃねえの？

歌麻はゆっくりと歩みを進め、相手に近づいた。

相手との間にいる僕の横を通った。

そのとき、いつもの明るい笑顔を僕に向けた。

『大丈夫』

声を出さずに言い放った言葉は力強かった。

「お前、なんなの？」

俺はその坊やと殺り合ってたんの。分かる？

邪魔すんなってことだよ。」

挑発するようにくつくつと笑う。

悔しい。

あんな相手に負けるはずがない。

なに焦ってるんだ？

冷静に考えれば、僕のほうが能力ちからの攻撃力が高いはず。即効性もある。

なにより、能力ちからを持続し続けているのに
体力がそう長く続くわけが無い。

「そうなの…。それなら選手交代って事で。」

歌麻が何かを操るように手を動かした。

「は？」

バカにしたように相手は笑ったが、一瞬でその顔は曇った。

「な、なんだっ!？」

相手は歌麻の指に操られ動く。

「そう、そのまま。」

歌麻の声は凜としていて、殺気が隠れていた。

「くっ…」

負けるわけにはいかない。

そう思って僕は体ちからに力を入れた。

能力ちからがすっかり抜け落ちているのに違和感を感じた。

何かが足りない。

能力ちからがないだけで、体はそう感じる。

なんだか悔しかった。

普通の人間にはもう戻れない、思い知らされた。

力が思うように入らず、震える。

立ち上がるとしても、痛みや震えで立ち上がれない。

「うご、け…動けて…!」

足を殴ってみるが、麻痺しているのか何も感じない。

「は、やく!」

自分にイライラする。

言う事を聞け、殺されたくないなら、さあ早く。

いくら思っても虚しいだけだった。

「ねえ…？ 踊って？」

歌麻は腕や指を踊るように動かしていく。

相手はステップを踏む。

「やめろおお！」

相手は自分の体を睨みつけた。

体が勝手に踊りだす。

相手にとって屈辱だったに違いない。

歌麻は更に体を動かし、相手を操る。

これがマリオネット。

操り人形のように操る。

それが歌麻の能力。ちから

「やめ、て、くれっ…！」

歌麻は手で銃をつくった。

そのまま自分の頭に向けた。

相手は本物の銃を頭に向ける。

手は大げさなほど振るえ、真っ青な顔はさっきの威勢を感じられない。
い。

「ばーん…」

歌麻はそう呟くと手でつくった銃に撃たれるふりをした。

——…ズキュンッ！

銃声が響いた。

相手は歌麻に操られ、自分で頭を打ち抜いていた。

血が飛び散り、体だけが形を残し
頭は原型を留めていない。

もともと変形させていた体は、元の形が分からなくなった。

「はい。」

「え…？」

歌麻はいつもの笑顔で僕に手を差し出していた。

僕がその手を取ると嬉しそうに笑った。

歌麻に引っ張られながら立ち上がると、足元がふらついた。

足は震えるし、力は入らないし、立っているだけ精一杯だった。

歌麻は僕の腕を掴み、それを支えていた。

「まだ…。」

歌麻は小さく言った。

「まだ、倒れちゃダメだよ…。」

字麻をちゃんと家に帰してあげなきゃ。」

歌麻は寂しそうに笑うと、傷ついた僕の腕に布を巻きつけた。

「誰一人として、いなくなっちゃ駄目。」

でも、字麻はいなくなった。だから、せめて安らかに眠れるように」

戦いに犠牲はつき物だって先生は言うけど、

僕はそうは思わない。

確かに仲良くしてた能力者が帰って来ないことは何回もあった。

殺されてもおかしくないこの世界で、

生きていくには誰かを殺さなければならない。

それは相手も同じで、

その犠牲に僕の仲間が選ばれた。
たったそれだけのことなのかも知れない。

それでも、この命が尽きるまで仲間を守れば犠牲は出ない。
だから、先生……？

犠牲は絶対に出さない。

今の僕には守ることは出来ない。

強くなる。

仲間を守るために。

強くなる。

自分に勝つために。

強くなる。

過去を振り返らないために。

「音麻……探すぞ。」

「うんっ！」

9..犠牲（後書き）

よければ評価や感想を♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5790g/>

Cursed child-たったひとつの願い-

2010年10月24日08時31分発行